

ヤシキリン通信

まちを楽しむ・みどりを楽しむ
—下保谷旧高橋家から考える学びと暮らし—

—2025・第5号topic—

- ・令和6年度季節イベントと一般開放
- ・アーボリスト（樹護士）による自然講座を実施しました
- ・下保谷四丁目特別緑地保全地区保全活用ガイドラインを策定しました



令和4年度より、市民の皆様には屋敷林の自然や歴史に触れていただくため、月2回程度の一般開放を始め、今年度で3年目となります。

また、今年度の季節ごとのイベントは、新緑、新秋、紅葉、桜の時期に実施し、多くの方にお越しいただきました。

今年度からのイベント時の新たな取組として、保谷落語愛好会さんをお招きし、母屋で落語会を実施しました。紅葉や桜の季節に合わせたお話を披露いただき、各回でほぼ満席の状態となり、参加者の方には大変好評でした。

また、紅葉のイベントでは樹木の専門家を講師に招いて、自然講座などを実施しました。樹木のプロとともに当地区を巡りながら、自然への考え方や知識を学ぶ大変貴重なツアーとなりました。都市部で貴重な自然が残る当地区で自然を学び、興味を持つ方の輪を広げて行くことを目指して今後も自然に関する講座などを実施予定です！（ツアーの内容は本誌で一部紹介しておりますので、内面をご覧ください！）

また、本地区の保全活用の取組を推進するために、令和7年2月



▲2024年9月の新秋のイベント
保谷落語愛好会による「荒屋敷寄席」の様子



▲2025年2月に策定した「下保谷四丁目特別緑地保全地区保全活用ガイドライン」はこちらのQRコードからチェック！

一般開放&季節イベントの様子

に「下保谷四丁目特別緑地保全地区保全活用ガイドライン」を作成しました。日頃の一般開放や季節のイベントで様々なご意見をお伺いし、これからの当地区の保全活用の方向性を示した内容になります。（詳細は裏面をご覧ください）是非、ご一読いただき、これからの当地区の保全活用へのご協力をお願いいたします！

⑦木の切断面と適切な剪定

木の枝を切る時は、カッティングターゲットポイントというポイントがあります。その場所を切ると、切り口がしっかり塞がります。上手く傷口が塞げない場合でも、木は自分で防御層というものを作って切り口から腐るのを防いだりしますが、ちゃんとしたポイントで切つてあげることが大切です。ご自宅で庭木にハサミを入れる時にも気を付けてあげてください。



また、枝と幹の境目に、ブランチバークリッジという線が出ていると健全な枝の証拠でぶら下がっても平気です。その線から少し離れて幹に沿って切つて上げると良いです。ですが、幹に沿いすぎると、幹の要素を切ってしまうことになりまます。そうすると、そこから腐ってしまうので、その塩梅はとても難しいです。

○自然講座のまとめ

木はただ生えているだけに見えますが、一本一本意味があつて生えています。それを紐解いていくと、とても面白いです。これを機会に自然について興味を持つて大事にして貰えればと思います。



下保谷四丁目特別緑地保全地区保全活用ガイドラインを策定しました！

令和7年2月に下保谷四丁目特別緑地保全地区保全活用計画に基づいて、この貴重な緑地を未来に残して行くための具体的な保全計画を示す『下保谷四丁目特別緑地保全地区保全活用ガイドライン』を策定しました！

屋敷林は本来自然の営みを利用して、人々の暮らしと生業に寄与する環境を人の管理によって形成してきたという特徴を持っています。そこで、環境の保全と人による活用という両面から、当地区を特別緑地保全地区として目指すべき姿に整備していくための具体的な方針を示しました。

表面のQRコードから閲覧できます。



ヤシキリン通信 第5号

発行：2025年3月 / 西東京市みどり公園課

『ヤシキリン通信』は、市民・専門家・行政らが協働し、下保谷四丁目特別緑地保全地区の活動を通して屋敷林と地域の魅力を発見し、その成果を発信するフリーペーパーです。

令和7年度の開放は、**毎週金曜 10時～16時**

※正月等、一部変則的な月もございます。
※開放時の天候や当地区の整備状況によっては開放を中止する場合もございます。詳細は当地区ホームページもしくは、当地区入り口の看板をご覧ください。

当地区のHPはこちらから⇒



アーボリスト（樹護士）による自然講座を実施しました

当地区のみどりは市民ボランティア団体である旧高橋家屋敷林保存会のご協力の元で維持・管理されています。その影響もあり、当地区へのご来場者の中には樹木や草花の生態や整備方法等に興味を持つ方が多くいらっしゃいます。

そこで、日頃から当地区のみどりの保全についてご助言をいただいております、欧米発の造園業や林業に関わる樹のスペシャリストであるアーボリストたちによって開発された『ツリークライミング』の資格を持った樹木メンテナンスのプロフェッショナルチームみやび造園さんに、敷地内を回りながら、樹木の生態や剪定等の整備方法に関する自然講座を実施いただきました。その内容の一部をご紹介します。

①ケヤキの由来

ある説では紅葉の色づきがとても綺麗なので、「けやけし」という「美しい」という意味の形容詞から「ケヤキ」という名になったとも言われています。また、とても硬い材なので、「硬い」から由来が来ているという説もあります。が、少し無茶ですね（笑）

昔は、男の子が大人になった時に建築材料として使えるようにと、男の子が生まれたらケヤキを植える習慣がありました。京都の清水の舞台も全部ケヤキで造られています。数百年に一度全改修する予定で、そのために今、

ケヤキを育てています。その木が育ち、切られて材として使われるときには僕たちはもう生きてはいませんが、後世に伝えていくために取組んでいるのです。この屋敷林という場所も同じで、後世に繋げていくことがすごく大切なことだと思います。それでは、高木林ゾーンの中に入っていきます。



①～⑦の箇所についてガイド頂きました。是非実際に当地区を訪れてツアーに参加した気分で見学してみてください！
※一般開放時には立ち入り禁止の場所もございますので、ご注意ください。



講演者
みやび造園 代表取締役
田中雅紀（Masanori Tanaka）

【沿革】
2001年 「みやび造園」を創業
2008年 ツリークライミングの技術を取り入れる
2015年 みやび造園株式会社を設立



みやび造園公式 HP はこちら!▶

②モミジとカエデの違い

モミジはカエデ類のなかの一種。主に葉っぱの大きいものがカエデ、小さく切り込みが深いのがモミジと言われています。

モミジの名前の由来は、紅葉が色づいていく様子が、「もみづ」という染料が水に溶け出していくような様子に似ていることから来ているという説があります。その由来の通り、同じモミジでも樹高の高さや日当たりによって紅葉の移ろいの違いを楽しめます。名前

で、何本か枯れてしまった木もあるのですが、悪い虫のように感じますが、自然にとっては欠かせない存在です。

昔の屋敷林は木を切つて燃料として使っていました。石油エネルギーが台頭してくると、木を切る必要がなくなり、大きく育った木に虫が入ること、枯れて倒木の危険が生まれました。カシノナガキクイムシは外来種等ではなく、昔からいる虫です。木を枯らすことも、自然界ではよくあることです。枯れ木や倒木は屋敷林や里山など人がいる環境だから問題になっているだけなんです。

④自然界のサイクル

この地域では珍しいスギが生えていますが、建築材料として使うためにかつて植えた名残ですね。かなり傷ついていて、コゲラというキツツキ科の鳥が開けた穴もあります。ですが、このような木も自然界では必要なもので、枯れた木に虫が湧いて、それを鳥が食べるというサイクルがあります。自然の中に不必要なものはないんです。



の由来については諸説ありますが、万葉集にもこのような記載があります。

③木と虫との関係性

このあたりには、ラップが巻いてあるクヌギがあります。これはブナ科コナラ属の木（クヌギやコナラ等）の中に入ると木を枯らしてしまう、カシノナガキクイムシの対策です。木の中に入ってしまった虫が他の木に広がらないように、ラップで閉じ込めています。ですが、この虫たちも決して悪ではありません。当地区でもこの虫によつ

⑤竹林のお手入れ

竹林は放置してしまうと密集して生えてしましますが、ここの竹林はボランティアさんによって毎年しっかり管理されているので、傘を差して歩けるくらいの密度で整えられていますね。

⑥落雷木

この竹林の奥に、落雷があったケヤキがあります。木は水分を多く含んでいるので、電気が流れると木の内部に熱が発して、樹皮が破裂したりします。ですが、落雷の発生は予知できないので落雷木の研究はなかなか進んでおらず、まだ分からない事も多いです。

（裏面へ続く）

